
消えると知って、好きだと言った。

にーとん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えると知つて、好きだと言つた。

【Zマーク】

Z3551G

【作者名】

にーとん

【あらすじ】

僕の彼女が消える。学校の工事のせいで。

早く。早く、早く！叶いもしないことを一人懇願する。授業中、社会科の先生の声だけが響く教室で。

時間が、もう無い。今日で終わりだ。そう、今日で終わり。彼女と会えるのは、今日で終わり。

僕が恋した、僕と付き合っている、僕の彼女と会えるのは、今日で終わり。理由は、学校の工事。全く、理由になつてない。だけど、それが彼女と会えなくなる理由だった。

なぜなら、彼女は妖精だから。僕は「みー」と呼んでいる。

チャイムが鳴った。先生の、ここまで。と言つ声で皆が席を立つ。僕は、一人廊下に出る。

廊下から、地下室へと続く階段を下りる。地下室がある学校は珍しいらしいがそんなことはどうでも良かった。

階段を下りるとみーがいた。田が合つと彼女は微笑んだ。

「本当に、今日でお別れなの？」

僕は聞いた。だって、彼女と別れなければならぬなんて悲しきたから。

だけど、彼女はいつも通り微笑んでこつ答えた。

「うん」

でもその微笑みは、悲しみが混じつた微笑み。

まだ。そんな顔は見ていたくないのに。

彼女と出会ったのは、僕がこの学校に入ったばかりの時だった。特に用もないのに地下室に入つて迷つたときだった。

「どうしたの？」

彼女は言った。僕は彼女は誰なんだろう、と思いながら

「迷つた」とだけ言った。

彼女は僕に帰り道を教えてくれた。

僕は、彼女のことが好きになつた。

それから毎日と言つていいほど僕は地下室に行つていた。

ある日、彼女に自分は妖精なんだ、と言われた。

僕はたいして驚かなかつたけど。なんとなく、こここの生徒じゃないことだけは分かつっていたから。

「驚かないの？」と彼女は言つたけど、僕は曖昧に笑うだけだった。

五日前、地下室を工事することを聞いた。僕が彼女にそれを告げると、彼女は今日みたいな悲しそうな顔をした。

「もう、会えないね」と言われた。

僕は、彼女に告白した。すると彼女は本当に嬉しそうな顔をしてくれた。

それが二日前。その日から、僕らは付き合い始めた。とはいっても、彼女を地下室から出すことはできないから、地下室の中でいつも通り談話するだけだけ。

だけど、僕はそれでも嬉しかった。彼女のことがずっと好きだったから。

そして、いよいよ別れの日が来た。

僕は彼女に言った。

「工事を中止にしてもらひきるよつてできないかな

でも、彼女は首を横に振る。僕もそのくらい分かっていたけど、聞かずにはいられなかつた。

「本当に、お別れなんだね

彼女は答える。

「うん、そうだね

僕は、もう彼女の顔を見られなかつた。

彼女と背中合わせになる。

泣いている顔を、見られたくなかった。

「泣いてるの？」

彼女が聞く。

僕は強がつて「泣いてないよ」と答える。

「嘘。本当は、泣いてるでしょ」

彼女は笑つてそう言つた。

「だつて、もう会えないんだよ？」

僕は叫んだ。悲しそぎたから。

「うん。だけどね、最後くらい、笑顔でじやあね。って言つてもう
いたいな」

彼女の願いは僕にできるものじゃなかつた。

「笑えるわけ、ないじゃないか」

「笑つてよ。私はあなたが笑つてると「ひが一番好きなの」

「だつて・・・」

涙ながらに訴える。

「ね。だからさ、最後に笑つて」

そして、気づいた。彼女も泣いている。

彼女は泣きながら僕にそんなことを頼む。

それに僕は、

「じゃあ、みーも笑つて」

と答える。

だつて、僕は彼女の笑顔が大好きだから。

「うん、分かった」

別れの時が、近づいていた。

ゆつくりだけど、確實に。

それは僕らに、絶望をもたらした。

だけど僕らは、絶望の中でも。

「ねえ、笑つてる?」

彼女が聞く。

だから僕は答える。

「うん。笑ってる。みーは？笑ってる？」

「うん、笑ってるよ」

僕らは、絶望の中でも。

泣きながらでも。

笑顔で、やよならを。

「うん、わようなりー」

「わようなりー、みー」

そして、背中越しに伝わっていた彼女の感触が、

彼女のぬくもりが、

彼女の存在が、消えた。

「さよなら」

僕はもう一度、今度は一人で呟く。

そして、地下室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551g/>

消えると知って、好きだと言った。

2011年1月6日15時07分発行